随想

多元社会

～国家を越える社会について～

加藤　宏光

若かった時代、著者は五〇歳で新しい世界へ挑戦したいと考えていたものだった。その新しい世界とは「大学もしくは大学院へ進学し若い世代と共に自分にとって未知のことを学ぶ」というもので、比較社会学を学びたいと考えていた。

「人間は社会的動物か？」と問われれば多くの人は、「YES」と答えるであろう。しかし、答えは「NO」である。人間あるいは類人猿を含む猿類等は、実は「亜社会性動物」に分類される。それでは「社会性動物」とはどんな生物なのであろうか。

完全な社会性動物は蟻や蜂のように社会を構成する動物をいう。

ヒトは向上心を持つ。向上心を持たないヒトは評価されない、といっても過言ではない。向上心とは、社会の上位へ登ることであり、平社員が「いずれは社長になってやる」と燃えることである。それに対して、蟻や蜂等の完全な社会性動物は、生まれ落ちた自分の社会的立場を崩そうとはしない。女王蜂は女王蜂としての任務に徹し、一生卵を産み続ける。働き蜂は、食べ物を運び群を守ることに徹して一生を終える。働き蜂が「いずれは自分も女王蜂になろう！」とは思わない（というと擬人的になるが…）。それでは、女王蜂はその蜂の社会で優位に立っているのか、といえばそうでもない。女王蜂は、働き蜂によって作られるといってもよい。嬢王蜂になるのは女王の王台という巣穴に産み付けられた卵のみであり、その王台へ産み付けられた卵が孵化した幼虫は特別な食事（ローヤルゼリー）を与えられて育つことで女王になる。つまりは働き蜂の計画に従って育てられているようなものなのだという。

こうした完全な社会性動物と対比しながら人間という社会を構成して生きている動物を見つめていると、社会と人間性のかかわりが微妙で面白い。

先月号で少し触れたが、P．F．ドラッカーという社会思想家の書いた「ネクスト・ソサエティ」（次の社会：上田惇也訳、二〇〇二年初版、ダイヤモンド社）という書物がある。この本に「世界において社会がどのように拓かれてきたか」を俯瞰している部分がある。彼が言うには、【国民単位にまとめられた統一国家に対比されるもの】として多元国家があり、江戸時代までのわが国や一八世紀までのヨーロッパに代表される地方分権国家がそれに当たる。この多元国家が強権によって統一国家にまとまった時、次の時代の「多元要因」である会社や労働組合、官僚組織、大学、病院のようなそれぞれの利害を前提とする集団が国家の構成要因として主役に踊り出た。しかし、八〇〇年前に生まれた多元国家と一〇〇年前からの多元社会を比較すると、前者が財力と権力に

基づいていた（領地を支配する貴族や大名をイメージされたい）のに対して、現代にまで続いている多元社会はそれぞれの機能を基盤としている。これらそれぞれの組織の機能は、元々家族の手に委ねられていたものである。しかし、専門化した機能に特化することで、それぞれが多元社会の要因として働くことになった。

スーパーマーケットにおける惣菜やファミリーレストランを例にとってみよう。著者の子どもの頃は専業主婦が当たり前で、ご亭主は外で働き生活の糧を得る役割、主婦は家庭を守ることに専念し、料理・洗濯等の家事に従事していた。しかし、男女雇用均等法等の社会趨勢を前提として、女性が労働社会へ進出することで、家事に従事する時間がなくなった（もちろん男性が役割を分担することで応分に家事をこなす家庭もある）。その結果、家事をこなす専門分野が独立し、経済行為の対象として成長してきているのが現状である。著者はその是非を云々しているのではない。

グローバルな会社組織では、生産という機能を前提として国境を越えていることからしても、統一国家の範疇を新しい概念で外れてしまっている（ドラッカーの言葉を著者なりに解釈）。

「現代社会の中で社会がどのようにまとまり直すのか」、これまでサイエンスという理論の組み上げで成り立つ分野に専門特化していた著者にとっては極めて新鮮なテーマである。亜社会性動物である、すなわちわれもわれもという欲望を生きる基盤とする人間が、向上心を持ちながら、ひとつの社会を構築していく。言うは易しく行うに難しいテーマはいまでも著者の興味をそそるのである。親しいクライアントのスタッフを育成するために、向上心を持つことの必要性を説きながら、その先の矛盾をどのように解決すべきかを考えることも多い。